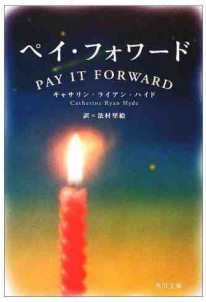
００５　Ｃａｃｃｏ



ペイ・フォワード　　キャサリン・ライアン ハイド（角川文庫）

前々から映画「ペイ・フォワード」が大好きだったのだけれど、古本屋さんで偶然原作をみつけ即購入（今まで原作があることも知らなかった！）。
カリフォルニアの小さな町の学校に新しく赴任してきた教師は「世界を変える方法」を考えるという宿題を出す。主人公トレヴァーは「僕が３人にいいことをする。彼らがお返しをしたいといったら、それを他の人にかえしてもらう」というペイ・フォワード計画を思いつく。そして世界は徐々に変わっていく。
「リング」「らせん」という小説は悪意の連鎖だった。 その真逆のお話とも言える。
人間が本質的に持っている優しささえあればやがて世界は変わる。誰もが生きていきやすいように。映画とはテーマはもちろん一緒だが、先生が黒人であったり、大統領と面会したり、些細な設定が違っている。一番大きな違いは少年の祖母が登場しないことか。映画では重要な役割を果たしていて少年の母親が自分の母親（少年の祖母）を許すシーンは感動的だった。

千年の祈り　イーユン・リー（新潮社）

本の紹介雑誌「ダ・ヴィンチ」の「絶対はずさない！プラチナ本」という企画をご存じですか？健ちゃんからたまたまもらった号の「プラチナ本」が、この「千年の祈り」でした。編集者のみなさんのお薦めにすっかり乗せられて、つい買ってしまいました。結果はお薦めに乗った甲斐はありました（でも絶対はずさないかってゆーとそうでもなさそう。たんたんとしたお話なのでドンパチ好きのうさおなんかは苦手でしょう。絶対ってのは所詮あり得ないけど、大多数もどうかなとわたしは危ぶむんですけどね）
中国で生まれ育った作家イーユン・リーが母国語を使わず英語を使って書いた短編集。巻頭の「あまりもの」は職をなくした林ばぁさんの初恋のお話。いくつになっても恋のときめきは心弾むし、そのときめきを「ばぁさん」と呼ばれるようになってから初めて知る主人公がせつないのです。短編でありながら村の生い立ち、主人公の一生を辿った「不滅」は壮大なストーリーで長編のような読後感があります。表題作の「千年の祈り」はアメリカに住む娘の離婚を心配する父親と家族との過去がだんだん明らかになっていくお話。父親は娘の他知り合いもいないアメリカで初めて出会ったイラン人の老婦人と心通わせるが、ふたりはお互いの母国語は話せず、かたことの英語でお互いを語り、ときに理解されないと分かりながら憑かれたように母国語で話す。
まったくレベルの違う話で恐縮だけれど韓国語を習っていて何か質問に答えようとすると、簡単に伝えやすい言葉を一生懸命探す。なんとなく小説の父親の気持ちもわかる気がするし、英語で小説を書いた作家の気持ちもわかるような気がします。安直だけど純粋な会話というのが会話の基本なのかもしれない（わたしも早くそのくらいまで上達したい）。
ひっそりと味わい深い短編集だと思います。

ブラフマンの埋葬　　小川洋子（講談社文庫）

「創作者の家」の管理人である「僕」のところに「ブラフマン」がやってくる。かれは裏庭のゴミバケツの脇に潜み、勝手口の扉に鼻先を付けて助けを求めていた。そしてブラフマンと僕の楽しく密やかな共同生活が始まる。かれは黒い鼻先と短い四肢と鋭い爪を持ち、撫でてあげると体を丸めて、心を許すとお腹を見せる。机を齧るのが大好きで僕の姿が見えなくなると淋しがる。まるで犬じゃんなんだけれど泳ぐときは爪の間の水かきを駆使する。言葉を発しないブラフマンの想像上の言葉がかわいい。「僕です。僕です」「早く一緒にでかけましょう」「ひまわりの種がもらえてうれしいです」大好きな漫画柴オー言葉でしゃべる（小川洋子さんの小説に登場する犬たちはぜんぶこの丁寧言葉で話します。これが大好き！）。

ブラフマンの名付け親である碑文彫刻師、雑貨屋の娘、レース編み作家、ホルン奏者、骨董市の年寄り、僕、登場人物たちに名前はない。ただひとりブラフマンにだけ名前がある。俗なわたしは僕が雑貨屋の娘を殺すのかと想像していたのだけれどこれは全然当たってなかった。無国籍な無記名なお話。わたしは僕にはどうやったってなれないが、こんなふうに生活する人に憧れを感じたりしてしまうのです。

これが柴オー！すっごくかわいい！柴オーは母を求めてたったひとりで旅をしている。辛いことや苦しいことがたくさんあるけど出会ったみんなの心に何かを残して旅を続ける放浪チビ犬。萩尾望都先生や井上健彦先生、好きな漫画はたくさんあるけど、漫画の原点が凝縮されたような「柴王」がもしかしたら一番好きかも！

大阪ハムレット①～②　森下裕美（双葉社）

これも漫画です。面白いです。前出のダ・ヴィンチのプラチナ本に他にどんな推薦本があるんだろうとネットで調べたら、この漫画もプラチナ本の栄誉を獲得していました。納得です。ダ・ヴィンチは信用できます!(^^)!

大阪を舞台にした下町人情劇。くすっと笑ってほろっとするＣａｃｃｏの大好きパターンです。絵はあんまり魅力的でないんだけれど、補ってあまりある面白さがあるのですよ。

作者の代表作は「少年アシベ」。少年とゴマアザラシの同居話。きゅ～と泣くゴマちゃんがめちゃくちゃかわいくて、スガオ、イェティ、もろもろ他の登場人物も面白いんです。スガオとの友情物語ふうなところもいいんですね！うさおも息子もみんなゴマちゃん大好きです！もちろん柴王もみんな好きです！

夜のピクニック　恩田陸　（新潮文庫）

今月の読書リストは２ページで終わりの予定だったのだけれど、なんだか本が読みたくて（しかも小説が）古本屋さんで買ってきてしまった。最近テレビドラマも幾つも見ているしで、どうやらわたし以外の人たちがどんなことを考えどんなふうに生活しているのか知りたいらしい。夜ピク（こうやって略される。さすが本屋大賞とっただけのことある。売れない本はこんなふうに簡略化なんてされない）は前から読んでみたかった。夜を徹して八十キロを歩き通す高校生活最後の一大イベント「歩行祭」。三年間わだかまっていた想いを清算すべく一つの賭けをした甲田貴子、彼女の異母兄弟である西脇融のふたりを軸に歩行祭の一夜が描かれる。なんかみんなモテモテだし、いい友達はいるしで、なんともうらやましい。そして高校生らしくきちんと悩みも持っていて、それについてきちんと考えもする。理想的な高校生たちみたいだ。終始さわやかな印象で読みやすいし一気に読んだ。同じ青春小説のテイストを持つものなら小川洋子さんの「シュガータイム」のほうが好きかな（シュガタイなんて誰も略さないけど）。この本の主人公の女性は拒食症で非常に背の低い弟がいた。このくらいの設定の方がどうやら好きみたい。

蛇にピアス　金原ひとみ　（集英社）

のっけからスプリットタンって耳慣れない言葉にびっくりする。舌ピアスに刺青とこんな痛い世界とは全く縁がない。こんな話をまだ十代の女の子が書いたのかとまたびっくりする。作者は実際にはスプリットタンなんかしてないだろうし、舌ピアスの穴を広げることにこんな執着は見せたりしないだろう。でもきっと主人公の女の子ルイと作者はどこかで繋がってるんだろうね。繋がってるからルイの気持ちが想像できるんだろうなぁ。後書きを村上龍さんが書いていてかれがこの作品を芥川賞にと押したらしい。わかるわかる。「限りなく透明に近いブルー」と持つ世界は共通してるみたい。ふたつの殺人事件の犯人を少女は推測するけれど、だからといってアクションを起こすふうでもなく頽廃の中でただビールを飲んでいる。これからどうなっていくのかは全く示されない。ダラダラした絶望感と共に頽廃的に生きている少女の話だけれど、なにか迫力があって面白い。

秋の牢獄　　恒川光太郎　（角川書店）

健さんにリクエストして借りました。王様のブランチの本のコーナーで筑摩書房の松田さんが絶賛してたし、ダ・ヴィンチのプラチナ本にも入ってたんで、読むぞ読むぞ、絶対面白いぞ！って意気込んで読んだけど、結果まぁまぁでした((+_+))１１月７日だけが繰り返されてしまう世界に迷い込んだ女子大生。彼女はある日同じ日を繰り返す仲間に声を掛けられる。この仲間たちとの交流が面白い。不安を共有する連帯感、でもその先に待っているものは・・。ところで１１月７日は息子ちゃんのお誕生日です。かれがこの世界に迷い込んだら毎日が誕生日なわけで・・。